

# PHD LETTER

## <26>

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1988・3

- 研修生東西日本スタディーツアーレポート .....P2~P3
- タイスタディーツアーレポート .....P4~P5

PHD運動とは1962年(昭和37年)より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事された岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年(昭和56年)からはじまりました。

発行:財団法人PHD協会  
 編集人:草地 賢  
 住所:〒650 神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202  
 TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867  
 郵便振替:神戸1-29688 財団法人ビー・エイチ・ディー協会  
 定 価:100円  
 レイアウト:エフアンドエフ



山岳民族生活向上センター (タイ、チェンマイ) 撮影 柿原登志夫

「遠い日本からよくきてくれました」  
 タイの友を訪ねた私たちを歓迎しての昼食会。  
 心のこもった手作り料理とカレン語の美しいコーラス。  
 歌の意味はわからなかったが、心にしみるハーモニーに  
 私たちは感激した。

# 東西日本 STUDY TOUR

PHD研修生は、日本での研修期間中、各々の個別研修の他に、研修旅行に出かけます。研修旅行の目的を、今年度は、

1. 様々な集会を通して、日本での学び自分たちの地域の様子を日本語で語り、自国での普及活動、グループ作り、リーダーのあり方などを実践として学ぶ訓練を行なう。
2. 広島、長崎での平和学習の他、様々な社会問題に触れ、その問題と取り組んでいる人々の考え方、活動から学ぶ。
3. PHD運動を支えて下さっている方々とお会いし、御礼と報告を行ない、あわせてPHD運動の輪を広げる。

の3つに置き、東日本研修旅行(1月中旬～12月上旬)を、西日本研修旅行(1月中旬～2月上旬)を、秋から冬にかけて実施しました。各地では、集会、見学、交流など暖かい受け入れをして頂き、誠にありがとうございました。

## 88東西日本スタディツアーを終えて

毎年11月に関東、甲信、その他岐阜三重和歌山地方に、そして1月に九州、中国地方に研修旅行を始めて3年が過ぎました。少しずつ受け入れて下さる会員、協力者の輪が広がって感謝しています。

今年度の東西研修旅行で出会ったこと、学んだことを感謝と共に報告いたします。東日本研修旅行は11月13日から12月1日まで岐阜中濃地方から富士、湘南、首都圏、山梨、飛騨高山、三重を回り和歌山最後の訪問地に於ける3週間の行程で実施しました。

目的の第一はアジアの青年達が自分の村に帰っていろいろな集会を開くリーダーシップの訓練。第二に各地のPHD会員、協力者のご支援に対する感謝と報告、第三は更に多くの方々にこの運動を理解していただくための普及ということでした。この旅のハイライトは神奈川県選手で池子の弾薬庫の緑を守るお母さん達との出会いと交流でした。スリランカのニラニーは「自分だけでなく子供や孫のために自然を残す働き」がここにあることを知り、大きな印象を得たようでした。千葉では風の

学校を訪ね伝統的な井戸掘りの方法を見学し、水不足に悩むカレンの村からきたコマ君は幾つかのヒントを与えられました。飛騨高山の隣村清見訪問の際は、研修生と村人の交流が今後の村起こしにつながる可能性を感じさせました。

研修生は東日本の都市、しかも首都圏の巨大都市にあこがれをもっており、楽しみにしていたようでしたが、実際行ってみて疲ればかりが残ったようでした。むしろ岐阜、千葉、埼玉の村々を訪ねていた時の方が生き生きしていました。日本の中の南北問題の構造を私は運転しながら移動中の車内で後等と確認したように思います。

通常研修先はバラバラの3人が一緒になる機会はほとんどありません。その点でこの旅行はあらかじめ5期研修生の出会いと交わり、そして連帯を促す場になりました。次年度研修生の為の研修費を得るために、皆様に買って戴いた絵かきやトレーナーの販売を通じ、共同作業の体験もさせました。旅の終盤には大体、販売手法や管理も出来るようになりました。そして何よりもミーティングの運営方法、彼等の日本での研修レポートをスピーチすることなどを通じて帰国後の村でのリーダーとしての心構えが、この旅で少し形成されたように思います。

西日本研修旅行は、このような体験をもとに1月15日から2月3日まで、やはり3週間の日程で行なわれました。福岡、筑豊、有田、水俣、熊本、長崎、北九州、広島、

岡山が訪問地。特に筑豊、水俣では近代化(工業化)の陰で何が起きたのかを学んだ(写真は筑豊で犬養氏からレクチャーを受ける研修生)。

研修生の反応が非常に高かったのは水俣でした。現在も病気に苦しみながらアジアに出かけ、水俣を繰り返してはいけないと叫び続けている浜元二徳さんから学び、今一人黙々とチソンの正門に週一回乗り込んでくる緒形正人さんから、人間としての基本的な生き方を教えられました。筑豊では犬養光博さんから隠されて現在見えにくくされている問題を学びました。インドネシアのアリ君は「筑豊も水俣も大きな力が民衆の自立を阻んでいる。日本人はお金のためだけに生きているのだろうか」と深刻でした。原爆については意見が分かれた。やはりアジアの側からの鋭い反応は日本の加害者性の指摘でした。その点広島で被害者、久保浦さんは明快でした。「自分は



実際の現場で色々と聞く 研修生被害者であると同時に加害者である。先ずそこから出発して平和を共に創りたい」と言われました。

このようなかなり多くの衝撃的な学びを通して、研修生は日本の豊かさの中にある矛盾を理解したようです。熊本ではPHDは日本の悪い所ばかり見せ、反目して帰すのではないかという批判がありました。既にコンボ、パンコ、ジャカルタでは公害が発生しているのです。草の根の村人がその被害を受けているのです。今、必死にアジアの国々が工業化を進めている時、少しでも日本の経験が「草の根の弱い人々」の側に伝えられる事は大切なことであると私は思っています。

九州、中国各地で30回を超える集会を開いた岡山が訪問地。特に筑豊、水俣では近代化(工業化)の陰で何が起きたのかを学んだ(写真は筑豊で犬養氏からレクチャーを受ける研修生)。



実際の現場で色々と聞く 研修生被害者であると同時に加害者である。先ずそこから出発して平和を共に創りたい」と言われました。

ていたがきました。研修生のやや断定的な日本に対する批判も、多くの方々が耳を傾けて戴きました。特に福山YMCAで開かれた高校生との対話集会は、大きな盛り上がりを見せました。高校生自身が開発援助について平常から学んでいたものを簡潔に核的に研修生に質問し、話し合いました。最後の問題提起は日本の社会の有様をどう変えるのか、そのために日本人のライフスタイルを別のシステムで生きなければならぬのではないかということまで来ました。

研修旅行での実感として「PHD運動はアジアの草の根の人々のためのみならず、日本人の生き方を問い直す運動である」ということの再確認でした。皆様有難うございました。

## 盛会だった交流会東日本ツアーより

昨年11月16日、東日本スタディツアーの一行を鎌倉の地にお迎えした。正直なところ、PHD運動は知名度が高いとは言えない。「アジアを考える会」の一つの集まりとして計画してみたものの、果たして何人参加して下さるか、余りに少数では御一行に申し訳めたいとPRには力を注い。結果当日は東湘南地区の主婦グループ、YMCA、教会等から39人もの人々が出席され、鎌倉教会の集會室はハチ切れそうになったのである。

「当日集まった顔ぶれを見て、話す順序や内容を最終的に決めます」と言われた草池総主事の自信の程は見事に的を射、十二分に満たされた集まりであった。総主事の南北問題から説きおこされたアジア各国の歴史の流れや現状の解説、わけてもキチッとされた数字で表される経済格差は、経済だけの問題ではなく、人種・貧富・階級・政治等の格差貧困に原因を持っている。その関連性の中に浮かんでくる日本は北に属し、それらの混乱——ベトナム・朝鮮戦争をも含めて——を巧みに利用して豊かな経済大国にのし上がり、現在の繁栄を謳歌していると伺った時、罪の意識を感じずにはいられなかった。PHDがこのマイナスを少しでも埋め、自主自立の村おこしを手伝う運動で

あることも理解出来たと思う。続いて研修生の3人が次々に立ち、スライド説明をしつつ、学んで来たこと、帰国後の抱負等を語って下さった。若い肩にかかっている光栄ある重荷をどうかその故郷で十分に担ってゆかれるよう祈らずにはいられなかった。又、私達はその人々との交流によって知らなかったものを知らされ、共によりよき地球を目指す動き手になりたいものと痛感した。

助川 和子(鎌倉市・PHD会員)

## 楽しみの新しい出会い西日本ツアーより

スリランカのニラニーさんと、スタッフのお二人をお迎えしました。小さく、粗末な我家ですが、そんなことを気にしてはい何も出来ません。掃除のゆきとどいていなこと食事をどうしよう等というささいな事は気にせず、新しい出会いを楽しみに泊まって頂きました。外国からのお客様をお迎えする時、いつもする様に、スリランカについての本を読んでおきました。食事は野菜やとりのから揚げやカレーピラフをよく作りますが、今回は、こたつの中で揚げながらの天ぷらと、インドカレーにしました。ニラニーさんもカレーを喜んで下さって手で食べて下さいました。色々な国からお客様に来て下さいましたが、堂々と手で食べて下さったのは彼女が初めてでした。三杯もおかわりといひ感激です。又、

お客様には、サイン帳にその方のお国の文字で簡単な言葉を書いて頂きました。中国語、アラビア語……、今回はシンハリ語。そしてクリスマスには、お一人お一人を思い出しています。

はじめの頃は留学生が遊びに来て下さるのささいやがっていた家族が、少しずつ協力してくれる様になり、今回は主人がスタッフの方にPHDについて聞こうとしてくれたこと、それは最大の収穫でした。この世の中に「もうけ抜きで動く団体がある」ということを身近に知って驚いたはずで。子供達はニラニーさんのいるスリランカ、〇〇さんのいるフィリピンと一人の人と国を結びつけていることができて、だから皆仲良く平和に暮らしたいね。」と語りかけてきます。居ながらにして外国の方と話し合える、こんな機会を与えられたことを感謝しています。

野口 克子(広島・牛田教会員)



各地でPHD会員の人や協力者の方々、そして色々な団体の人々と交流を持ち、会の普及に役買う(写真は有田で中学生との交流会風景)

## リーダーシップを学ぶ第5期研修生

86年度までは、知識や技術の修得を第1の目標においていました。87年度は、知識や技術を最優先するのではなく、村人の生活の改善を進めていくための姿勢、考え方、方法などリーダーとしてどうあるべきか学ぶことを大きな目標としました。技術や知識の修得も大切ではあるけれど、村づくりを行なう際にそれらは手段として役に立つものであり、知識、技術のみでは真の住民自身の村づくりは難しいということを事例や経験に基づいて考えたからです。個別の研修では、研修生の出身地域の課題に基づいて、主に生活の現場に身を置くことによる方法を優先しました。例えば農業研修であれば、農業者宅に住み込んで、農業技術、農業経営の様子、地域の人々との関係などを学びました。日本の技術や方法が彼らの村で通用するとは限らず、むしろ彼らの村には彼らの村の良い方法があることを前提に、日本の農業のよい点や問題点をみて、自分たちの村の農業は今後どうあるべきかを考えていくことが一番のテーマでした。漁業や保健衛生、家政といった分野も同じ方法です。地域全体の生活を改善していくためには、農業だけ、漁業だけが関係するものではありません。もっと広い範囲で、日本での村づくりのあ

り方など、地域の住民として様々な活動に積極的に参加していく中で、村づくりのヒントが得られると思っています。これは今年度は不十分であったので、今後の課題です。研修生たちが、様々な研修を受けて思っていることは、「日本で勉強して学んだことをただ伝えるだけ、教えるだけの先行的な役割にはいけない」「教えるのは簡単にはできない。しかし、村の人たちが自主的に動くようにしていくことは時間がかかり大変なことだが、大切なこと」ということです。リーダーシップという点から言えば、彼らの意見は喜ばせているのですが、彼らとしては、村人たちは目に見えない技術や知識を待ち望んでいるため、すぐに効果の表れないことは村人から逆に信用してもらえないのではないかと、不安をも抱えています。研修のまとめ、また今後の活動につながるものとして、2人の研修生は最後にフィリピンの農村にて研修を行ないます。村の人々各自の生活の問題をどのようにとらえ、それを改善するためにどんな活動をしているのか、そうした村人の自主的な取り組みを促すためにはどんなリーダーシップが必要であるのか、少しでも学ぶことができれば、と望みます。(研修担当主事 増岡祐介)

## 洋裁の技術教授

የኒሮ ደብዳቤ  
ሰላም ለሁሉ  
ገንዘብ ለሁሉ



村へ帰ったら主婦や若い女の人を集め、日本の婦人技術のような会を組織したい。会では手芸や洋裁の技術を教え、生活の一助にしたい。また村では衛生管理や栄養面で改善する必要があるため、日本で学んだ技術を実践していこうとする。日本では、人々が皆、非常に忙しかつたのが印象的でした。

## 農協を設立したい

ገንዘብ ለሁሉ  
ሰላም ለሁሉ  
ገንዘብ ለሁሉ



日本では色々な事を学びました。村へ帰って農業をしていきますが、村の人々と資材の共同購入や共同出荷を、農業協同組合を作って進めたい。また村の土地はやせているので、堆肥を入れて土壌の改良をしていく予定です。換金作物としてコーヒー、栽培や牛の放牧などもやっています。

## 日本の良い所を...

የኒሮ ደብዳቤ  
ሰላም ለሁሉ  
ገንዘብ ለሁሉ



1年間日本で勉強しましたが、私の村と事情が違いますが、日本だことが全て有効ではありません。その中で良いと思うものだけ実施していく予定です。例えばエビの養殖ですが、日本のように配合飼料を例えずにできるだけ自然にまかすようにしたいです。また、底質を浄化し効率は高く魅力的ですが、資源を根絶やしにする可能性が強くない。

年もおしませました12月24日から7泊8日、タイに帰った第3期生プリチャーさん、第4期生ウィラットさん、ベリアさんの村を訪ね、彼らの村づくりの現場を知り、アジアの草の根の人々に学ぶタイスタディツアーが実施された。今回は定員をこえる申込みがあり、徐々にはあるが、日本の人たちのアジアへの関心の高まりを感じた。現在、日本で研修中のブラカシ・コマさんを先に事前に4回の学習会をもった。

参加者は研修生を日本で指導をされたドクター2人、農業者1人、ホストファミリー1人を中心に、小・中・大学生、学校の教師、主婦と総勢15名。研修生の推薦団体であるKBC(カレン・パプテスト会議)、タホタ村、メニヤハディ村、ムシキー村の皆さん、そして3人の研修生の暖かい協力があり、有意義なツアーとなった。KBCでのオリエンテーションを経て、村に入り、3つの班に分かれ、3泊4日ではあったが村の生活を体験することができた。

メニヤハディ村に滞在していた間、毎晩村の人達と健康管理をどうするかについて、ベリアさんの通訳で、話し合いをもった。我が国でも今から20~30年前までは、農業従事者は実際の年齢より年寄りに見えた頃がある。この地域の人々30才をすぎると、日本の感覚から10才を引いたところが実際の年一と思われる。この寒さ、不十分な寝具からくる睡眠不足、栄養不足、慢性疲労などによるものと思われる。そこでは農作業の改善、台所の改善を含めた家屋構造の工夫も健康管理には重要である。この地域ではベリアさんの活動みられるように地域保健活動が進められているが、山積する課題に対し、その基本は学校での教育にあるように思う。我が国長寿国に至った背景には、肉体的健康についていえば一般教育の役割が大きかったように思う。また、日常的には食事改善、台所改善、住環境改善などに加え、健康体操の普及も効果があるだろう。今度の滞在中はメンバーの一人がラジオ体操のテープを持参していたので早速指導した。いくつかの家に招かれて気がついたが、いわゆる売薬が相当に出回り、それに頼っているようすなので、それにも増して前述の点が大切なことを説明した。更に村人だけの力では難しいだろうが、医療機関の整備も併せて進めることも必要であると感じた。

多田 学(出雲市・島根医大教授)



村の結婚式のごちそうと泊めてもらったターカムさんの家で食べていた食事がいっぱいだったのでびっくりした。僕はターカムさんがとてもごちそうをしてきているのに気がついた。僕達が食べている一回分が、村の人達の何回分にもなるのだとわかった。

藤井 隆至(高槻市・小6)

「昔は山に動物もいたし、野草もたくさんあった。今は何もない。自動車があるがいいことはない。昔の方が良かった」とメニヤハディのおばさんが話してくれた。昔は焼畑農業が行なわれていたのに、なぜ今住みにくいといわせるのだろうか。それは自然の復元力以上に焼畑や森林の伐採を行なったことだろうし、山岳民族だけでなく、タイ人の山地への進出も考えられる。また自動車道路の整備により、奥地の森林の伐採を容易にし、更に伐採後の植林が充分行なわれていないことも大きな原因であろう。野崎 曜生(兵庫県大屋町・出石養護学校教員)

村に入る前KBCの事務所でもKBCの働きの説明をきいた。その時カレンの人が昔、お祭りに使っていた伝統的な太鼓や鐘を見せてもらったけれど、今、そういうものは全部売ってしまつて村には残っていないときいた。昔は自給自足でのお金のいらない生活だったのに、最近はいろいろとお金の必要になってきているらしい。来年には電気が村に入る予定というが、電気代を払うお金はどうするのかと不安に思う。

片野 美雪(高槻市・中3)

12/24	大阪→チェンマイ
/25	KBCでオリエンテーション 山岳民族生活上センター見学
/26	チェンマイ→ボッケオ村
/27・28	A班ボッケオ村、B班ムシキー村
/29	ムシキー、ボッケオ村→チェンマイ KBCで反省会
/30	チェンマイ→バンコク
/31	バンコク→大阪



日本で研修した成果を案内するプリチャーさん(右)と日本で指導にあたった田中さん(中央)

ウィラット・ソンセン

帰国研修生の現況 ~タイ~

プリチャー・ムアンチャン	ベリア・スティダ
滞日1985.3~1986.3 主な研修内容 農業 ムシキーの学校で農業を教える。学校の近くに家があり、その敷地にモデル農場をつくり近所の人々にも野菜づくりをコツコツと手本を示しながら指導中。帰国後子供が生まれ現在、奥さんと2人の男の子と住む、独身。	滞日1986.4~1987.3 同 保健衛生 幼児教育 毎日はKBCのオフィスで働き、夜は、将来看護学校に入学する資格を得るために夜間高校に通っている。時々村に入り、保健衛生の指導を村人に行なっている。兄の家族と共に住み、独身。

現地の食事に出た野菜の色が淡く種子の退化がみられ、種子の更新が必要に感じられる。日本で普及しているF1はかえって都合が悪いが、5年以上自家採種ではまずく思う。種子をイロリの上で保管していたら適当とは思えず、直射日光の当たらない、涼しい場所が良いと助言した。畑はラテライトのやせた赤土で酸性土壌になりやすい。村では落葉、草を材料とした堆肥、灰を入れている。気候に適した野菜を選べば、良いものも作れるように感じたが、商品とするには消費地との交通の便から難しく思う。ネズミを捕獲して食べる程度蛋白質が不足しているの、白大豆など作りやすく、栄養分の高いものを普及させたらどうか。またムシキーには政府の農業試験場があり種々の試験が行なわれていた。プリチャーさんもそのスタッフと親しいようなので、村人と共にここを活用すれば良いだろう。

田中 五郎(兵庫県淡賀町・農薬)

「味の素をごはんにかけて食べているのですよ。健康には悪いと思うのですが」というベリアさんの疑問に、「それは良くないよ」と言いながらも、味の素にかわるものか現地では何になるのか、ここでは肉、魚は貴重品であり、日本のカツオ節やコンブにあたる旨みを出すものが手に入らないのだ。数少ない材料の中でおいく食べたいという欲求と、安全性との兼ね合い、明確に答えきれずに終わった。



村に滞在中は、毎晩のように村の人々(中央)がドクターに健康管理の相談をもちかけていた。

村の雑貨屋には合成洗剤、化学調味料があり、日本の援助でつくられたという道路には日本の車、オートバイが走っている。しかし、健康を維持するための食べ物や少く、農場には日本では禁止されている農薬が使われ、死者が出たり、奇形の魚が発生した話をきいた。日本での公衆衛生においても「健康より生産が優先されてきた」と言われてきたが、この村の体験から、援助、協力も健康がとまわしいようになっており、このあり方を改める必要を感じた。

関 龍太郎(松江市・松江保健所長)

ムシキー村に着いた翌日、プリチャーさんか働く村の学校を訪ねた。生徒数は310名。学年は1年から9年までで幼稚園も併設されている。義務教育は6年間で、ここはKBCと政府が半々の負担で運営され、授業ではタイ語が使われる。生徒の負担は小学生が年間100パーツ(1パーツは約5円)、中学生は350パーツがそうだ。この地域では小学校には70%が、中学校では35%が、高校になると4%の子供が学校に行っているという。高校はチェンマイまで行かないとなく、年間1万パーツ以上かかる上、卒業しても就職先がなく、ほとんどが村に戻ってくるそうだ。学校を訪ねて一番印象に残ったのは子供たちがとてもいきいきしていることで、学校に来るのが本当に楽しい顔つきだった。

五木 成章(守山市・膳所高校教員)

タイにおいて、カレンの村において、工業化先進国で起こってきた、数々のあやまちが繰り返されるのは、あまりに哀しい。といって、私たちがその人々の近代化を否定することなどはできない。私たちにできることのひとつは、近代化というものの闇の部分に彼らに知らせて、近代化を押し進めることによって、利益を得る側の情報操作を見抜ける情報を伝えていくことだろう。彼ら自身が立ち上がるのを待つべき、これは意見もある。最終的にはその通りなのだ。例えばタイの政治を考えたとき、なにより、これは構造的な問題であるのだから、それはあまりにも無責任である。しかし今、ここでまず私たちがしなければならないことは、私たち先進国の一人一人が変革することに他ならない。学生が、金のためだけに安易に就職するのは、生活の場においては、商品がどのようにして生産されているのかを知り、教師が、本当の情報を伝えるようになれば、その影響は日本国内のみに限られないだろう。自分たちがよって立つ基礎を、常識の部分まで疑わなければならない。情報は受け取り信するものではなく、自分で探し出すものだ。無知であることが、あたりまえに生活することが、「共犯者」となることにつながる。そんな世界に私たちは生きているのだ。本当に情報が必要なのは、私たちが自分自身ではないだろうか。

小田 博志(吹田市・大阪大学3年生)

私達の訪れたボッケオ村、メニヤハディ村は、電気も水道も通っていない。今の日本では考え難い生活で多少の不安があったものの、この素朴な生活は、私の心をリラックスさせてくれ、心地よく時が過ぎた。幸せを計る基準は何だろう。少なくとも日本のものさしでは答えは出せない。カレンの村の素朴さだけを切り離して、パラダイスのように賞美するのは、私たちのエゴで、彼らが文明を享受したいと願うのは当然であろう。貨幣経済が発達すれば、美しい民族衣装も、すきただけの家も見られなくなるだろう。しかし、彼らにとっての「幸せ」を、私たちがは計ることはできない。

内藤 香代子(神戸市・甲南女子学生)

美しい聖歌を歌ってくれた村の人々に「昔からカレンの人々に伝わる歌はないですか」と尋ねると「知らない」という答え。「昔話」の問いにも返事もなかった。この地域のカレンの人々にとってキリスト教とその文化をとり入れたことには功罪両面があるだろう。自分達の伝統文化を誇りをもって大事にしたいとして、将来の方向にも大きな違いが出てくる。このことは日本人にとってもあてはまると感じた。

松尾 良子(京都市・パン屋勤務)

村で会った小さな兄弟に持っていた菓子の袋を渡した。受け取った兄はすぐ弟の方へかけて行って渡し、ひとつふたつ食べると又兄へ袋を返した。このやりとりを見ながら、我がことを思った。飽食日本といわれ、物があふれているのに、ひとつの袋のお菓子のとりあいで。お菓子好きのお父さんが加わるときは大戦争である。競争ばかり育てた悪い癖があったと反省しつつもいた。

藤井 諒子(高槻市・主婦 第2・3期生滞在受入れ家庭)

# 草の根の人々を訪ねて

Report from Asia and South Pacific

## 1. 東マレーシア

1987年3月に初めて訪問して以来二度目のサラワク。来るたびに再生不能といわれる熱帯林伐採の範囲が拡大しているのに心が痛みます。

今回の目的は1988年度の農業研修生の選考です。旧知のSCSのウォンメングジョー氏、F・アジャ氏と打ち合わせ、到着の翌日から早速候補地サリケイのロングハウスを訪問しました。2人の候補者とその家族のインタビュー、ロングハウスの住人達との話し合いを進めるにつれて少し様子が変わるのに気づいてきました。何かPHDが誤解されている。どうも突然金持の日本人が尋ねて来て一年間日本にタダで連れて行ってくれる、何はともあれ行ってみたい。そんな雰囲気を読み取れるのです。一体SCSはこの村にどんな形でPHDのことを説明したのだろうか、そんな疑問が大きくなり、とうとう研



昨年6月に日本での研修を終えたランジット君は、果樹園の手入れに励んでいる。

修生選考は中止、村の見学に切り替えました。シブに帰って再度SCSと協議し、メンジョー総主事と以下の事柄を決めました。

- ① PHD運動の目的、方法を今迄送った資料をもとに全スタッフで再度復習する。
- ② その上でロングハウスの住民の中から、SCSのスタッフから研修生の候補者を推薦してもらう。
- ③ PHDはあくまでロングハウスの人々の問題を自分達で解決しようとする動きに呼応する。



ロングハウスは、インドネシアの東マレーシア、ボルネオ地方に住む先住民族の住居形態。1つの棟に10〜30家族が高床式住居に住む。(東マレーシア・サラワク州にて)

無理に研修生を決めようと思ったなら可能ではありました。しかしPHD(日本・都市)の希望を先行させるのではなく出発点は草の根(第三世界・村)におかれるべきである。と思い次回に延ばしました。

## 2. スリランカ

シンガポールを立つ時も、コロンボに到着する時も大変緊張しました。シンハリとタミールの抗争は旅行にも大きな影響を与えます。エア・ランカ航空の機内には私服警官と思われる人々のきびしい目、トイレ使用後はビニールの長手袋をつけたエアホステスの内部点検が行なわれます。深夜の空港の厳しいチェックのみならず、ボヤワラーナ村迄の夜道で兵士の検問を受けたことも初めての体験でした。

チャールズ村長は6月の日本訪問後、PHDの動きや支援者の実態がよくわかった、自分も今迄以上に村のために尽くしたい、という強い意気込みが感じられました。ラン

ジット君に自分の土地を貸し、彼をテナントファーマー(日本の小作人よりずっと村での地位が高く信頼されている)にしたようです。ランジットも日本から帰って本気で村に腰を据える決心をしたと両親が嬉しそうに私に報告して下さいました。まずはチャールズとランジットが実験的にデイリーファーム(多分ミルクや卵、野菜など現金収入が得られる農業)を行ないそれが成功したら徐々に仲間を加えて協同組合にしたい、これに加えて保健活動や女性の職業訓練をニューラニーに託し総合的活動にしたい。と村長は長期計画を語ってくれました。その計画を総合的に強化するために協議の結果農業、保健、幼児教育の分野で2名の青年を継続して招くことになりました。その後残念ながら本人と家庭の都合でパドミニさんの来日が不可能になりましたが、農業研修生としてアジャンタ・ブレマラル君は2月末に来日しました。

ボヤワラーナ村にPHDの仲間がこれで4人になります。村起こしの動きを見守りたいと存じます。

## 第6期研修生紹介



氏名  
Ms. WORAYA JITJONG  
(ワラヤ・ジツジョン)  
生年月日  
1964年8月29日生 23才  
出身  
タイ国カランシ県カオン部  
ウォンウィン村  
職業  
農業  
研修分野  
畜産、淡水魚を手段とする農村開発

ワラヤの村は今大きく燃え上がっています。農民協会が村の中に生まれ少い村人の自分達で村をつくらうとする動きが活発になっているからです。彼女は6人姉弟の長女。父親は死亡。母親は事情があって家を出ており実質的に彼女が中心になって家を切り盛りしています。大変忍耐強く、そして姉妹、親類のみならず村の人々からも厚い信頼を得ているようです。

ウォンウィン村、農民協会こそでの推薦を受け日本での研修成果が村人から期待されています。



氏名  
Mr. AJANTHA PREMALAL  
(アジャンタ プレマラル)  
生年月日  
1967年7月3日 20才  
出身  
スリランカ国アラウア県  
ボヤワラーナ村  
職業  
農業  
研修分野  
農業全般、特に畜産、そ業を中心とする農村開発

アジャンタの両親は15年前にボヤワラーナ村に移ってきた貧農です。村の中の荒地で石の多い土地を借り、誰よりも朝早くから夜遅く迄働き続け、遂に最近1.5エーカーの自作農になりました。村で評判の働き者一家です。その孝行息子がアジャンタです。まだ20才という若さで少し不安を感じましたが、人物の点からも意欲の点からも責任をもって推薦するというチャールズ村長の熱意を信頼して選考しました。



氏名  
Mr. AFNAL(アフナル)  
生年月日  
1962年12月9日 25才  
出身  
インドネシア国西スマトラ州バサマン都アイルバンギス村  
職業  
漁業  
研修分野  
漁業全般特に漁法、漁具及び漁業協同組合を手段とする漁村開発

アフナルは5人の候補者の中から選ばれました。しかし5人に絞られる前に村全体の漁師の民主的な話し合いが、4〜5時間なされ文字通り村民の推薦で出てきました。彼は小さい時に母親を亡くし、再婚した父とは別居し伯母のもとで育てられました。がっしりとした体格、意志の強い頑張り屋であると同時に記憶力の良い若い青年のようです。どんな厳しい訓練にも耐えてみせる。そしてアイルバンギスに帰って草の根からの漁業協同組合を強化したいというのが彼の夢です。

## PHD NEWS

快調/定例セミナー「寄り合い」

10月の合宿以降毎月1回のペースで開催している「寄り合い」は、平均15名の参加を得て充実の会となっています。開催日も月末土曜夕方に定着しつつあります。詳しくはお問合せを。

- 第2回 12月 スリランカの教育事情
- 第3回 1月 身近な国際―神戸市長田区を例に
- 第4回 2月 カレンの人々に学ぶ

以降、ジャーナリストのみたアジア、お米を考える、教育現場の国際等続々企画中。

会費・ご寄附・寄託状況

10月	79件	1,834,683円
11月	70件	1,473,032円
12月	335件	7,285,291円
1月	258件	2,173,439円
	742件	12,766,445円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴いたしました。ご協力に感謝申し上げます。

FAX新設

このほど当協会事務所にFAXを導入しました。

FAX(078)351-4867

なお電話番号は従来通りです。

88年度スタディツアー予定

今年のアジアを訪ねる旅は下記を予定。  
88年8〜9月 インドネシア、スリランカ  
88年12〜89年1月 タイ  
89年3月 フィリピン

新規会員・寄付者ご芳名は、個人情報保護のため掲載しておりません。

新規会員・寄付者ご芳名は、  
個人情報保護のため掲載しておりません。



### /編/集/後/記/

私がPHDを知ったのは、ちょうど半年前、就職活動の最中でした。会社の面接官に将来の夢を聞かれ、「ネパールのボカラで音楽会を開くことですか」と答え、よくあっけにとられた顔をされました。昨年、ネパー

ルの山中で、子供達とウォークマンで遊び、JAZZのリズムに敏感に反応する彼らの姿を見て以来、頭を離れなくなった私の楽しい夢の一つです。夢は人にいいふらすもので、私以上に乗り気な人も現れ始めています。PHDの夢は、さらに多くの研修生を日本に呼んで彼らの村づくりのお役に立てること、そして多くの日本人が直接研修生と接触することで自分達の偏見をはずせるきっかけ

を作ることだと思います。素敵な夢はたくさんの人に伝えて、是非実現させたいものです。四月からフツのOL生活を始める私ですが、アジアの夢づくりのプロ集団として、PHDに期待しています。(H.S)

#### レター<26号>編集メンバー

赤松恵美子	环光子	得原輝美	柿原登志夫
梶原靖子	川那辺裕子	佐々木久恵	芝美代子
			(五十音順)

### ロータスクーポン・グリーンスタンプ・ブルーチップ

1987年10月20日～1988年2月9日までの協力者ご芳名 順不同・敬称略

岩手県 藤江 七穂実  
京都府 中澤 敦  
大阪府 小枝 洋子 室橋 孝子  
兵庫県 熊川 藤子 食べものくらしを見直す会  
永田 義一 兵庫県立宝塚西高等学校生徒会  
広島県 嘉屋 苑子  
千葉県 三愛幼稚園母の会会員  
八千代市立八千代台西小学校PTA

#### ロータスクーポン・グリーンスタンプ・ブルーチップの送り先は

〒650 神戸市中央区元町通5-4-3  
元町アーバンライフ202 TEL.(078)351-4892  
ビー・エイチ・ディー協会宛に



### 会員制度のご案内

PHD運動は会員によって支えられ、すすめられています。  
ぜひ会員としてご参加下さい。

終身維持会員：1口10万円  
会 員：年額1口5千円  
友の会会員：年額500円以上 任意の額  
(ジュニア対象)

郵便振替  
神戸1-29688  
財団法人ビー・エイチ・ディー協会